

## 読書をすれば良好な友人関係が築けるのか ーネット使用・ネット依存との関係を手がかりにしてー

三浦 真帆

近年、中高大学生の不読書率が上がっていることがよく指摘されている。その理由の一つは、若年層のネット使用時間が増加したことと関係するとされているが、両者の間に因果関係が存在するかどうかは明らかになっていない。また、長時間のネット使用は、ネット依存や SNS 疲れなどを引き起こす恐れがあり、いかにすればネット依存を低減することができるかの検討も非常に重要となっている。

これまで、読書をすることは共感性を高め、批判的思考力を向上させることが先行研究により明らかになっている。このことから、批判的思考力が向上すれば、ネット上にある情報をクリティカルに読み取ることができるだけでなく、無責任な発言をせず、他者と円滑なコミュニケーションができると考えられる。そこで、本研究では、「読書することは、リテラシーを高め、それを介して共感性が高められ、ネット依存が低減し、その結果友人関係満足度が向上する」という仮説を立て、諸変数の関係を明らかにすることを目的とする。

上記の目的を達成するために、関東地域の国立大学に在籍する大学生 520 名を対象に、2019 年 6 月～7 月の間に質問紙調査を行った。調査項目は、個人情報、共感性、批判的思考力、友人関係満足度、ネット/SNS 使用、ネット依存度、ネットリテラシー、現在の読書習慣、就学前から高校時代までの読書習慣、母親の最終学歴などで構成した。回答済みの調査票を提出したのは 414 名であり、回答率は 79.6%であった。本研究では回答に不備等があるものを除き、369 名を対象として分析を行った。

分析を行った結果、以下の結果を明らかにした。(1) 幼少期から現在まで継続的に読書することがリテラシーを高め、その結果、ネット依存を低減させた。また、リテラシーの向上は友人関係満足度の向上にも役立ったが、ネット依存から友人関係満足度への影響は見られなかった。(2) 現在の読書は共感性への直接効果は見られなかったが、リテラシーを介して共感性の向上に役立ち、その結果友人関係満足度の向上に正の効果があった。しかし、共感性からネット依存への低減効果は見られず、むしろ深まることになった。

幼少期の読書習慣、現在の読書習慣ともに、ネット依存の低減と友人関係満足度の向上に直接効果は見られないが、リテラシーを介してネット依存が低減するとともに友人関係満足度が向上した。このことから、単なる読書をするだけでなく、読書することでリテラシーを高めることがネット依存の低減や友人関係満足度の向上に役立つと示唆された。また、現在の読書から共感性への直接効果が見られなかったことから、共感性を高めるには娯楽のための読書ではなく、共感性を養うような読書をするのが重要であると示唆された。一方、共感性からネット依存への依存効果とネット依存から友人関係満足度への効果は見られなかった結果から、若年層は、ネット上での人間関係と現実世界での人間関係の境界があいまいになっていることが示唆された。

(指導教員 叶 少瑜)